

15:1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。

15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。

15:4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。

15:5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、

15:6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。

15:7 言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

15:8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。

15:9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。

15:10 言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

年間第 24 主日 9 月第 3 週説教 2013.9.15

99 より 1 が大事

ルカ 15 章 1-10 節

羊飼いは 99 匹を置き去りにして 1 匹を捜しに行く、99 匹はどうなるかわからない、計算にあわない話ですが、言わんとしていることは明らかです。99

匹より1匹を優先する、大事にするということです。ふつう、わたしたちは計算のたつことだけを考えます。そのふつうの考えでは99という数はどうでもいいという数字にはなりません。先週のテキストは計算しろという勧めでしたが今日のテキストは計算とは別に大切なことがあることを教えます。

どんなに自分ひとりが頑張ってみてもどうにもならないという、そういうような無力感というものは誰でもあると思います。人間は無数の中の一人というのは事実ですから、一人では何もできないという無力感は必ずおこります。けれども無力感を知るということはいいことです。人はこのような無力感を感じることがないと、自分がやっているんだ、自分が頑張っているんだ、という「のぼせ」になります。こういう「のぼせ」は凝り固まりなので解けるほうがいいのです。そういう意味で無力感の一つの浄化作用です。でも無力感にひたってしまう、そこで止まってしまうと、何にもならないわけです。

無力感といいます、それは本当に無力を知っているのかということそうでもない。まだ力があると思っているから、その無力にがっかりする余地がある。それは、まだまだできるとしている無力感です。逆に言えば、自分は努力が足りないと責めることにもなります。だいたい人間にはもともと力なんてありません。人はまったくの無力、石コロと同じようなものです。でも種まきをしない鳥が神に養われ、野に咲く花がソロモンの栄華より美しい、まして人はモノをつくることができると思えることもできます。（*1）

石コロのような、ただの土くれの人間が考えたりモノを作ったりする、これが神の奇跡でなっているということがはっきりしてくる、言い換えれば、無力があらためて無力にされると、無力こそが力の出所だとわかってきます。そうするとたった一人で絶望するとか無力感でしょげかえるということはありません。一人から始まる。そこから始まらなければどこから始めるんだ

ということになる。またそういうことがいたるところで始まる、そんなことはないを決めることは誰にもできないのです。風は思いのままに吹く。いつどこで聖霊の風が吹くのか誰も知ることはできない。（*2）

無力を知ること、無力に徹することはいわゆる無力感は消えます。そこに、いままでは知ることのなかった新しい忍耐力と勇気、愛と勇気がわいてくる。ほんとうに人間は無力でいい、無力が大事です。これをわきまえないで愛だとか、絆だとかをいいたすと、これはへんなことになってくる。それはある意味では無力感よりもっとひどい状態です、その人はいくら健康のつもりでいても病気だといえるでしょう。

1匹が大事だというのはそういうことです。これはずしたら、どんなに数をたくさん集めたってダメだということです。99匹より1匹が大事だということはその意味です。

そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』というであろう。5-6節

「見つけたら喜んでその羊を担いで家に帰る」神と人間は実際にこのような関係です。わたしたちの命の根元、根っこにはこの関係があります。

*1

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。
マタイ6章26-29節

*2

3:8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。ヨハネ3章8節